

## 教師のための「真正な学び」の研究：第三年次の研究

－教材研究のための研究論文の読解とその「真正な実践」への活用－

池野 範男

本稿では、共同研究の第三年次の研究のねらいを説明するとともに、価値と知識が交差する領域である社会科公民領域において取り上げられる選挙制度の教材研究を事例にして、政治学領域の論文（著書）読解を行い、教材研究の在り方を検討した。目的は、著書読解、教材研究から公民単元づくりにいたる過程に見られる学びの構造を解明し、研究者の学びの構造を学習者の学びの構造に活用することで、研究者の学びを「真正な学び」に転用する過程を明らかにすることである。

そのために、加藤（2003）『日本の選挙』を取り上げ、その著書の章節構造、内容構造、学びの構造を、著書読解を通して解明した。その結果、次のことを成果として示すことができた。

- (1) 著書の章節構造は、主に、小選挙区制と比例代表制という選挙制度の功罪を比較考察している。
- (2) 著書の内容は、選挙制度に関する議論の仕方と、議論内容の2つの層からなっている。後者の議論内容としては、制度、思想、理念の3つの関連構造として組織されている。
- (3) 著者は、選挙の制度、民主主義の思想、社会の在り方に関する理念の3つの相互関連を認識することが重要であると主張し、制度の詳細な情報だけを追いかけるよりも、3つの相互関連を追究することを重要視している。
- (4) 教材研究は、これら(1)から(3)のいずれかに焦点化するが、その決定は、教科観に依存している。  
(1)は専門内容重視、(2)は教科内容重視、(3)教科目標重視の教科観に依存していることを明らかにした。

キーワード：論文読解、教材研究、教科観、政治学、学びの構造

## **Study on “Authentic Learning” for School Teachers: Research in the Third Year: Interpretation of Academic Papers for Researching Teaching Materials, and Utilization for “Authentic Practice”**

Norio Ikeno

This paper describes the aim of the study in the third year of the joint research and reports investigation on how teaching materials should be by interpreting an academic paper (book) in the field of politics taking the example of the electoral system, which is widely addressed in the field of civics (a field of social studies),

where values and knowledge intersect. The objective of the study is to reveal the process of converting learning by a researcher into “authentic learning” by clarifying the structure of learning in the process that starts with interpretation of a book and research of teaching materials and ends in preparation of a teaching unit and utilizing the structure of learning by the researcher in the structure of learning by the students.

To achieve the goal, *Nihon no Senkyo (Elections in Japan*, author: Shujiro KATO, 2003) was investigated and interpreted; and its chapter constitution, content structure and structure of learning were clarified. From the investigation, the following results were obtained.

- (1) The chapters of the book are constituted so as to mainly compare and contrast the merits and demerits of the single-seat constituency electoral system and the proportional representation system.
- (2) The contents of the book consist of two layers, i.e. methods of discussing the electoral system, and contents of discussion. The latter is organized into the three relevant structures of system, idea and principle.
- (3) In the book, the author emphasizes the importance of recognizing the interrelation among the electoral system, ideas of democracy, and principles related to how society is. He also lays importance on pursuing the interrelation of the three rather than tracing detailed information of the system.
- (4) Teaching materials should focus on any of (1) to (3), but the decision depends on one’s view on the school subject. The investigation clarified that (1), (2) and (3) lay importance on contents of a special field, contents of the school subject, and aims of the school subject, respectively.

Keywords: Paper Interpretation, Teaching Materials Research, View of School Subject, Politics, Structure of Learning

## 1. 問題の所在

本共同研究も第3年次となり、最終的な研究段階を迎えている。本共同研究のねらいは次の点にある。

教師が進める学習に、専門科学（研究）者の学習という視点を入れ込んで、専門科学（研究）者の論文や著書の読解を通して、その研究内容を消費活用するだけでなく、専門科学（研究）者が行う人としての学習とその過程を読み解き、それを活用し、授業作りの前段階の教材研究の手法とすることである。

それゆえ、「真正な学習」の基本構造とそのためへの支援に関して、各研究領域の「真正な学び」の構造として、論文読解から教材研究へと適用する構造を解明することを目的にしている。

本（2016）年度の目的は第三年次として、論文や著書を読解し授業（単元）づくりへ至る教師の教育活動に即した、教材研究における論文の構造と授業の構造の関係を解明することである。

『学習システム研究』の本号では本稿を含め、共同研究者による言語（国語）領域、知識（社会）領域、知識（科学）領域の単元（授業）づくり、および、言語（英語）領域と知識（社会）領域の教科横断型、CLIL(Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）単元づくりのために、教師が行う論文（著書）読解にもとづく教材研究の過程に焦点化し、論文読解、教材研究、単元づくりの3つがどのような関係にあるのか、あるいは可能性があるのかを究明することにした。

## 2. 本年度共同研究の目的と方法

### （1）研究の目的

本年度の共同研究は、各研究領域において、小・中・高校におけるある単元を念頭に置き、教材研究を行う際の論文読解を研究対象にす

るにした。研究者の（1つ、あるいは複数の）論文（著書）の読解を教材研究の一つに位置づけ、その論文読解を教材研究へ結び付けるために、論文の読解で見出す研究者の「真正な学び」を、教材研究に重要な要素である、学習者の「学び」へと変換する過程とその構造を解明することにした。

本共同研究において用いている研究仮説を再掲しておく（池野・福井，2015，p.4）。

○研究仮説

真正な実践（authentic practice）の実行。

①研究者にも「学び」がある。

②研究者の学びは、研究論文の読解を通して、再生可能である。

③その再生は、

1. 論文そのもの読解

2. 執筆者の使用する基本概念，理論による読解

3. その学問領域の基本概念，到達理論による読解

の3段階として可能である。

④研究者の学びの再生が、真正な実践を作り出す。

⑤真正な実践は、研究者の学びを学習者の学びに変換することである。

### （2）研究の方法

第一年次は、研究仮説の①から③を主に検討し、第二年次は④まで延長し、複数の論文（著書）を検討した。

第三年次の本年度はさらに発展させて、①から⑤までの過程を研究範囲にした。そこで、教材研究過程における論文読解で見出される研究者の学びを、単元（授業）づくりの基本となる学習者の学びにどのように応用したり活用したりするのかの変換過程に研究の焦点を当てることにした。

そのための研究手順は次のようにした。

①教育学研究科の教員単独，研究科の教員と大学院

- 生のペア、研究科の教員と附属教員とのペア、あるいは、附属教員の単独で、
- ②特定単元に関係する（1つ、あるいは、複数の）専門研究論文（著書）を選択し、
- ③その論文の読解による、学びの構造の抽出を行うとともに、
- ④単元の学習へ転用する学びの構造を究明し、
- ⑤専門研究論文の学びの構造から、単元の学習の構造への転換構造を探究する。

本稿では、価値領域と関係した知識（社会）領域の中の、とくに政治領域の選挙制度に関する教材研究を事例とする。教材研究の対象として取り上げる政治学領域の論文（著書）は、加藤（2003）『日本の選挙 何を変えれば政治が変わるのか』である。この読解を行い、教材研究の在り方を検討する。

そのために、選挙制度の著書読解、教材研究から公民単元づくりにいたる過程に見られる学びの構造を解明して、研究者の学びの構造を学習者の学びの構造に適用したり応用したり活用したりすることで、研究者の学び＝「真正な学び」を学習に転用する過程を明らかにすることにした。

### 3. 『日本の選挙』の読解

#### （1）『日本の選挙』の構成

本稿で読解の対象とする『日本の選挙』は、選挙制度が複雑で、わかりにくいものであることから、誰もが平易にわかりやすく解説するとともに、「新しい議論を始める契機」（加藤，2003，p.iv）を作るために執筆されている。

本書の各章は次の構成になっている。

まえがき

第一章 日本の「選挙制度論」の虚妄—こんな議論では改革はできない

第二章 民主主義思想と選挙制度の類型—各選挙制度はどんな理念にもとづくのか

第三章 選挙制度の細目とその作用—細かな違いが

ときには結果を大きく変える

第四章 政治制度と選挙制度—選挙制度を変えるだけでいいのか

第五章 選挙制度の作用—選挙制度を変えれば政治は変わるのか

第六章 選挙制度改革の視点—どう議論し、どう改革すればいいのか

終章 理念なき選挙制度を排せよ

あとがき

巻末ノート

参考文献

本書の目次である上記の章構成からは、本書の要点は見えにくい。しかし、本書は選挙制度と政治制度と民主主義思想の3つの関係を論じようとしていることは推測されるであろう。それゆえ、本書のカバーのそでには次のように記されている。

とるに足りない些末な問題とみられがちな選挙制度だが、政治全般に及ぼす影響力は決して小さくない。

「選挙制度が適切なら何もかもうまくいく」という哲学者オルテガの言をまつまでもなく、選挙は民主主義をいかなる形態にも変える力を秘めている。小選挙区制や比例代表制の思想的バックボーンをわかりやすく紹介し、「選挙制度のデパート」と揶揄される無原則な日本の現行システムを改善するための道筋を示す。（加藤，2003，そで）

そこで、池野（2014，2015a，b）に従い、3段階の読解、つまり、①著書そのものの読解を章ごとの要約と問いの構造の抽出、②著書において中心的な概念を基軸にした構造的読解、③特定概念の説明や配列、表現に着目したレトリック的な読解、として著書論文読解を進める。このような読解を通して、本書の内容の要点、その構造、そして研究者である加藤の研究の構造を明らかにすることにしたい。そのために、①-③の読解の3段階として、章構造、内容構造、研究＝学びの構造の順に、

本書を読解することにした。

## (2) 『日本の選挙』の読解

### 1) 章の構造

各章の概要をまとめ、それを答えとしたときの各章の問いを見つけてみよう。このような読解をするねらいは、各章を問いと答え(Q-A)の関係で整理することにより、本書全体の構成を見えるようにしてやることにある。

まえがきにて、著者である加藤は「わが国の選挙制度の議論のあり方に、強い不満を感じているが、それを本書にぶつけ、一つでも風穴を開けたいと思って執筆した。本書が新しい議論を始める契機となれば幸いである。」

(加藤, 2003, p.iv) と述べている。本書はこの新しい議論を始めるために作られている。ではその新しい議論とは何であろうか。ヒントは、副題にある。本書の副題は、「何を変えれば政治は変わるのか」である。当然その答えの一つは、選挙制度である。それならば簡単な議論であり、従来のものと同様なものであろう。新しい議論のヒントは、選挙制度の改革とともに、カバーのそでに示されていた「思想的バックボーン」を紹介することであると述べている(加藤, 2003, そで) 点にある。本書は、日本の選挙、とくに選挙制度を取り上げ、論議するが、その議論の仕方を新しいものに変える。その新しさは、制度の背景にある、思想的バックボーンを議論し、制度と思想との関係を検討する点にある。

第一章は、わが国の選挙制度に関する議論では改革はできないと主張している。これまでの議論の問題点は選挙制度の「技術論的なレベルに終始している」ことであり、新しい議論は「理念にまでさかのぼった検討」をする必要がある(加藤, 2003, p.28) と主張している。本章の問いは選挙制度に関してどのような新しい議論をする必要があるのかである。

第二章では、新しい議論として「選挙制度と民主主義の理念の関連」(加藤, 2003, p.35)

を解説する。それは選挙制度を2つの類型に分け、「それぞれどのような民主主義の理念に立っているのか」を探求することであり、2つの類型とは、「民意の公正な代表を重視する『比例代表制』と「安定政権の創出を重視する『多数代表制』」とである(p.35)。比例代表制の基本観念は、ミルに代表され、数に比例した代表、多数に多くの代表を、少数には少なく、しかしゼロにはせず、それなりの数を与えるというものであり、これこそが民主主義の原則とするというものである(p.48)。一方、多数代表制は、バジヨットに代表され、「安定した多数派(いわゆる『機能する多数派』)が形成され、政局の堅実な運営を可能にする」(p.51)。つまり、半数以上の多数を獲得したものがその代表を務めるとする。これら2つの考え方に対して、ポパーは民主主義の基準を別のものに変更する。つまり、従来の、国民の支配という考えではなく、「流血を見ることなく、政権を交代させる可能性」に変更することを主張し、その点が選挙制度の議論では重要であると指摘している(p.62)。第二章では、その章の副題が示しているように、「各選挙制度はどんな理念にもとづくのか」と問うているのである。

第三章は、選挙制度の細目として、比例代表制と多数代表制のそれぞれに属する下位の各制度を説明している。2つの大きな類型に入れることができるいくつかの下位の選挙制度を説明し、どのような働きをしているのか、その作用を説明している。

第四章では、政治と選挙がどのように関連しているのか、その視点から選挙制度をどのように考えるべきかを論じている。その際、選挙制度は政治システムの下にあるサブシステムであることと各制度の相互作用という2つの観点で検討される。例えば、議院内閣制と大統領制では、取るべき選挙制度は全く異なるものとなる。議院内閣制は議会の多数派を形成し、首相を選ぶ。それは、バジヨット

がいう「機能する多数派」を作ることが重要である (p.116)。このように、政治制度と選挙制度は相互に関連し、密接な関係を持っていると主張している。

第五章は、選挙制度が政治的にはどのように作用するのかについて述べている。わが国では、たとえ、小選挙区制をとっても、人物本位の選挙となりやすいので、政党に力が集まりにくく、二大政党制にはなりにくい (p.156)。選挙制度があるからといって、その制度が目指すものを実現するものではないのである。

第六章は、選挙制度についてどのように議論し、どのように改革すればよいのかを論じて、制度改革の視点を得ようとしている。例えば、参議院である (pp.179-182)。そもそも参議院はどんな働きをするところなのか。そこから議論する必要があると述べている。

終章では、これからの日本の選挙制度はど

のようにすべきかに関して、筆者の意見を述べている。筆者である加藤は、小選挙区制か、比例代表制かのいずれかに特化すべきであり、とりわけ、見主主義思想の実現の観点から「小選挙区制一本がよい」と、考えている (pp.196-198)。

以上のように、各章は概要とそれに対応した問いとしてまとめられる。

## 2) 内容構造

各章の概要と問いを、Q-A の関係で明示化したのが、次に示した、表 1『日本の選挙』の章ごとの Q-A である。

表 1 をみると、第 1 は、各章には要約に応じた問いがあることである。問いは、いくつかの章に副題として示され、明示化されている場合もあるが、明示化されず、隠されている場合もある。要約を答えとすることにより、問いを見出すことができる。

表 1 『日本の選挙』の章ごとの Q-A

章	章 題	Q	A	章の主題
まえがき		何を变えれば政治は変わるのか	本書は新しい議論を始めるために作られている	政治に関する議論の問題提起
第一章	日本的「選挙制度論」の虚妄	選挙制度に関してどのような新しい議論をする必要があるのか	わが国の選挙制度に関する議論では改革はできない	選挙制度に関する議論の仕方の問題点の指摘
第二章	民主主義思想と選挙制度の類型	各選挙制度はどんな理念にもとづくのか	各選挙制度はそれぞれ民主主義の原則を持っている	議論の視点としての選挙制度と民主主義思想との関連
第三章	選挙制度の細目とその作用	選挙制度のそれぞれはどのような働きをしているのか	各選挙制度は政治的な作用をしている	選挙制度の政治的作用
第四章	政治制度と選挙制度	政治と選挙をどのように関連させ、その視点から選挙制度をどのように考えるのか	政治制度と選挙制度は相互に関連し、密接な関係を持っている	選挙制度と政治制度との関連
第五章	選挙制度の作用	選挙制度が政治的にはどのように作用するのか	選挙制度があるからといって、その制度が目指すものを実現するのではない	選挙制度の政治的作用の結果・効果
第六章	選挙制度改革の視点	選挙制度についてどのように議論し、どのように改革すればよいのか	それぞれの制度がそもそもどんな働きをするところなのかから議論する必要がある	選挙制度改革の視点としての制度の本来的な社会的機能
終章	理念なき選挙制度を排せよ	これからの日本の選挙制度はどのようにすべきか	小選挙区制か、比例代表制かのいずれかに特化することがよく、とりわけ、見主主義思想の実現の観点から「小選挙区制一本がよい」と、考えている	民主主義思想の実現からみた選挙制度の優先順位

※筆者作成。

第2は、各章には、選挙制度に関する主題が設定されていることである。章の題目のほか、各章の要約に示されるテーマを主題と見れば、各章の主題はすべての章に見て取れる。

第3は、選挙制度という主題を論じるだけでなく、その関連する政治制度、民主主義やその思想という関連する概念によって説明しようとしていることである。

第4は、各章間には、選挙制度に関して、それぞれの章が構造的に関連させていることが推測されることである。章の主題を通観してみると、3つの要素を含み込んでいることが理解される。①選挙制度、②民主主義思想、③これらの関連である。本書は、これらの3つの要素とその関連を論じている。

第5は、議論の仕方である。本書のまえがきにも述べていたように、選挙制度に関する新しい議論をするために、従来の議論の問題点、新しい視点、それに基づく議論、その結論という構成を採用していることである。

これら5点は、本書が選挙制度を選挙の仕組みと技法という技術的論点から論じるのではなく、政治制度や民主主義という、選挙制度が深く関連する政治上の関連概念と結びつけて論じているところに特徴があることを示

している。

### 3) 研究＝学びの構造

上記の5つの特徴を踏まえ、筆者である加藤が本書を構成している研究の枠組みを見出すことにしたい。

上記の5点の特徴から研究の特徴として、2つのことが明らかにすることができる。それは、本書では、新しい議論を行うということと、選挙制度を政治制度、民主主義思想と関連して論じるということである。この2つことが本書では、二重構造となっている。つまり、筆者である加藤は、選挙制度に関して新しい議論をするために、選挙制度を選挙制度そのものとともに、政治制度や民主主義思想などと関連して論じているのである。

そのことを図として整理したのが、次の表2の『日本の選挙』の構造である。表2は、縦列に章構成を示し、横列には2つのこと、すなわち、議論の仕方と議論の内容とを示している。

表2が示していることは、本書が新しい議論の構造と、その内容という二重構造として、選挙制度に関する説明を筆者である加藤が行っている、ということである。

表2 『日本の選挙』の構造

	議論の仕方	議論内容		
		制度	思想	理念
まえがき	問題提起			
第一章	問題点の指摘			
第二章	議論の視点の提示	制度と思想の関係		
第三章	議論(1)	制度の政治的作用		
第四章	議論(2)	選挙制度と政治制度の関連		
第五章	議論(3)	選挙制度の政治的作用の 効果		
第六章	改革の視点の提示	制度の本来的な社会的な機能		
終章	議論の結論	民主主義思想実現から見た選挙制度の選択		

(注記：議論内容の空白部分は、論じていないことを示している。)

※筆者作成。

議論の仕方では、問題提起、問題点の指摘、新しい議論の視点の提示、議論、結論を引き出すための改革の視点の提示、結論という、議論を進めるオーソドックスな手順を示している。研究も議論であるという基本姿勢を明確に持って、本書を構成している。

議論の内容は選挙制度の議論の「新しさ」を示している。それは、内容の下位に示した制度、思想、理念という要素と要素間の関係である。選挙制度と政治制度の関係を論じることは多いけれども、正面切って、選挙制度を民主主義の思想や理念と関連づけて論じることはなかった。たぶん、筆者である加藤は、ポパーの論考（Popper, 1987；伊藤, 1989）に触れて、このような議論の仕方を学んだと推測される。

もうひとつの議論の内容は、新しい議論を実質化し、本書そのものを構成しているものである。その際、読者が気をつけねばならないことは、個々の内容も重要であるが、論点の構成である。議論の仕方も重要なものであるが、議論内容が選挙制度を起点にして、章を経るにつれて、説明される内容が、政治制度との関連、民主主義の思想との関連へと拡張され、第六章に至る時には、最大の、かつ、筆者の議論の目的地へと誘い、選挙制度、政治制度、民主主義の思想と理念という要素が絡み合って議論されるように構成されている。

本書の特徴は、次の3つにあると言えるだろう。特徴の第1は、選挙制度に関する議論の仕方と、議論内容の2つの層から構成されていることである。第2は、議論内容としては、制度、思想、理念の3つの要素を関連づけて構成していることである。第3は、著者である加藤は、選挙制度、政治制度、民主主義の思想や理念の3つの相互関連を認識することが重要であると主張していることである。

これらの特徴は、本書の読解における重要な到達地点である。

#### 4) 読解のまとめ

本書『日本の選挙』は、政治学領域の研究書である。政治学は、制度とその思想、それを支える理念の3つを相関的に関連づけて、研究する学問である（濱嶋ほか, 1997, p.354, 参照）。

本書は、政治学の基本的な研究視点をうい、研究を進め、その内容を構成している。この点で、本書は、政治学研究そのものを示したものである。また、これらの研究視点を選挙制度という具体的で、2000年前後の政治状況下では極めてホットな話題に適用し、読者に研究の視点とその重要性を知らしめたものであったとも言えるだろう。

本書の著者である加藤は、結論として、小選挙区制という制度がポパーのいうように、民主主義という思想において「革命」を可能にし、無血の政権交代を進めることだと説明し、社会が民主主義の思想が実現する社会こそが、ひとが選択可能な社会理念のひとつとする。当然、比例代表制にも同じ思想と理念をもっている。その他の選挙制度も同様である。あとは、人がどの制度を選択・採用し、どの思想や理念を将来の社会づくりとして選び取るか、決定することが重要なのである。

以上で進めてきたことは、本書の読解を、章構成にもとづく著書の概要読解、章構成の関連にもとづく著書の構造読解、著書の構造に潜む研究の構造の読解という3つの段階で行ったことである。これらの3つの読解は、筆者である加藤の研究過程であるとともに、思考の過程である。教師や教員志望学生がすべての教材研究において、このような詳細な読解をすることは、時間的理由から難しいものであろう。しかし、その単元や授業づくりにおいて中核にする論文や著書はこのような3つの段階の読解をすることで、教材研究から単元・授業づくりへの手がかりを与えるものである。すなわち、3つの段階の読解は、単元・授業づくりにおけるそれぞれの内容レベ

ルを指し示している。具体的にいえば、章構成は、当該単元・授業で取り扱う、(選挙制度とそれに関連する政治制度という)内容そのものを、章構成の関連構造は(選挙制度に関わる)単元や授業におけるその取り扱いの枠組みを、章構成の関連構造が示すその研究領域の研究構造は社会科の単元や授業の構造と、その領域(本書の場合だと、政治領域)における社会の在り方を示すものとなっているのである。どの段階の読解を活用するかは、読解する教師や教員志望学生の選択ではあるが、どの段階でも活用可能である。

このような本書を読解する中で、読解そのものの意義について以下に、まとめておこう。

- ①社会科公民領域の教材研究としての読解もまた、論文(著書)そのものの読解、その論文(著書)が主として使用する概念を手がかりにした構造的な読解、構造に潜むその学問領域の研究の構造やその表現形態を解明する読解の3つの段階として読み解くことができる。
- ②その読解のそれぞれの読解内容は、章構成の概要、章構成の関連構造、その学問領域の研究構造として提示することができる。
- ③これら3つの段階の読解には、それぞれの内容レベルを指し示している。章構成は、該当内容そのものの、章構成の関連構造は研究の仕方、研究構造は研究の構造とその領域の社会における在り方を提示している。

#### 4. 教材研究から単元づくり

##### (1) 読解の適用・応用

では、上述してきたこのような著書の読解を実際の単元や・授業づくりへどのように適用・応用するのか。

前項で述べたように、読解の3段階に応じた適用・応用は次の3つの基本形としてある。

1. 論文(著書)内容の適用・応用
2. 論文(著書)構成の適用・応用

##### 3. 論文(著書)の研究構造の適用・応用

どれを選択するかは、教材研究をしている教師や教員志望学生によって異なる。その相違は、適用・応用のねらいと教科観に関連している。

たとえば、選挙制度の個別内容として、中選挙区制がわが国の選挙制度にあったが、小選挙区、大選挙区とともに、この制度について詳しく検討したいと思うとき、本書(第一章)は活用できる。

また、選挙制度の学習では個別制度だけではなく、選挙制度そのものの問題点、また選挙制度と政治や民主主義の在り方まで検討したいとなれば、本書全体の構成を活用できる。

さらに、選挙制度の学習を通して日本の政治の在り方、また社会の在り方まで検討させたいとすると、本書が目指している意図に一致して、本書のねらいをそのまま活用することができる。

読解の3つは、単元・授業づくりにおける重点の置き方と教科観と関係している。

教師や教員志望学生が1.論文(著書)の内容読解を適用・活用することを重視すると、教材となる内容、つまり、選挙制度の詳細な情報を獲得することに重点化する。個々の選挙制度の詳細、問題点などを中心に理解し、これらを単元の中心においた計画を作ることになる。社会科の教科観でいえば、専門内容重視である。

また、教師や教員志望学生が2.論文(著書)の章構成読解を適用・活用することを考えると、表1の構成、あるいはその主要部分を単元(授業)計画に活用することになる。章構成に示されたり、論文や著書の基本構成として抽出したりして見出される内容の構成をそのまま、あるいは、部分を適用・応用する。社会科の場合にはその多くは、社会科学の研究の応用となり、社会科が社会科学研究として位置づけられることになる。社会科

を社会科学科と見なす教科観では、このような第二の読解は活用しやすいものと言えよう。

さらに、3. 論文（著書）の研究構造の読解を適用・応用する場合には、社会の現状の理解、構造の理解に留まらず、その問題点や課題の克服、また、より良い社会の形成を目指した探求をすることになり、本書の著者である加藤が行った新しい議論を活用することになる。このような議論は研究そのものの構造と研究の背後に意図された新しい社会構築の構造との2つを含むことが多い。この3の読解を選択する人の多くはこの両方を選び取り、社会形成を社会科学科にしやすい。

以上のように3つの読解は単元・授業づくりへの移行にはそれぞれの方向性がある。教材研究における読解後の単元・授業づくりへのこのような移行段階での選択・決定というものは、当事者に任されている。教師や教員志望学生はそのときどきの自己の意図に従い、いずれか、あるいは複数を選択することになる。

1. 論文（著書）の内容の適用・応用では各自の教科観は意識されにくく、読解の内容を即時に単元や授業の内容に移行させてしまい、なぜその内容が取り上げる必要があるのかを反省し、自らの教科観を検討する余地はほとんどないことが多い。しかし、2. 論文（著書）の構成や3. 論文（著書）の研究構造の適用・応用に関しては、各自の教科観に依存する。すなわち、教師や教員志望学生がどのような社会科学を目指し、どのようなことを社会科学単元や授業で行うとその目指すことが実現するかという問題と相関している。

政治的意思決定を社会科学公民単元では行わせたいと事前に決めておけば、意思決定が生徒たちにできる場面に適したこと、たとえば、日本の選挙制度としては、小選挙区制と比例代表制のどちらがよいのかを決定させることを単元・授業の中心部分を構成することになる。この場面におけるアイデアを本書から

借用することになり、主として、2. 論文（著書）の構成における意思決定に関わる部分を切り取り、単元・授業づくりに活用することになる。

政治的の問題に関する議論を社会科学公民単元で行わせたいとするならば、本書が進めている新しい議論そのものを活用することができる。上記した表1や表2のような本書の構成から、議論の構造を引き出し、単元や授業を作ることになる。

このように教材研究から単元・授業づくりへは一概に決定されるのではなく、教師や教員志望学生を選択によって多様なものがあるのである。

## （2）単元づくりの事例

本稿では、本書（加藤、2003）の読解に関する適用・応用事例として、池野のグループが行った中学校社会科学公民単元「選挙制度から民主主義社会のあり方を考える」（池野ほか、2004a, b, 参照）を取り上げてみよう。

池野グループは、単元名が示すように「民主主義社会のあり方」を生徒に考えさせることを目指した社会科学公民単元づくりを意図していた。その意図は、社会科学は「国家・社会の形成者を育成する」ことを目指すからである。その1つの目標として、選挙制度の選択・決定を通して社会の在り方、とりわけ、民主主義社会の在り方を考え、一人ひとりの生徒が自ら社会に在り方に関する意見を形成することをねらう。とくに、わが国の現在や将来に関わる社会の在り方を生徒各自が展望でき、描くことができることを支援することを目指す。

そのために、単元の目標を次のように定める。

以下の二点を理解することで、制度の背後にある民主主義観を取り出し、現在の日本に望ましい選挙制度と社会のあり方を批判的に考えることができ

る。

- ①多様な選挙制度それぞれには、内在する理念が民主主義観としてあるということ
- ②制度は社会を規定し、社会を作るということ

この目標を実現するために、次の表3のような単元構成の枠組みを作った（池野ほか、2004a, bを参照）。

**表3 単元構成**

パート	役割	
導入	選挙制度への問い	
展開1	二つの選挙制度	
展開2	比例代表制	制度そのものの理解
		制度の背後にある民主主義観の理解
		制度が生み出す社会の実態
展開3	小選挙区制	制度そのものの理解
		制度の背後にある民主主義観の理解
		制度が生み出す社会の実態
まとめ	現行の選挙制度の反省とより良い社会の探求	

※筆者が、池野ほか（2004a）より作成。

本単元は、単元全体が選挙制度をより良い社会の在り方から議論することを意図して設計されている。選挙制度をどのように問うのかを考えることから始め、わが国の選挙制度が2つのものに代表できることを確認した後、それぞれの制度における、制度そのものの理解、制度の背後にある民主主義観を含んだ理解、制度が生み出す社会の実態を含んだ理解という3つの段階で、単元の展開部の2と3を構成し、最終、まとめで、現行の選挙制度に関する問題点と改善点をより良い社会を作り出すという視点から探求するという構成に

なっている。

この構成は、著者である加藤が本書で意図している新しい議論を中学校社会科公民単元で実現するようにしたものである。本単元は、3つの読解の適用・応用の観点でみれば、3.論文（著書）の研究構造の適用・応用を基盤にしながらも、2.論文（著書）構成の適用・応用を用いたものである。当然、1.論文（著書）の内容の適用・応用は随所に活用している。

### 5. 研究のまとめ

本稿では、社会科公民領域において取り上げられる選挙制度の教材研究を事例にして、政治学領域の論文（著書）読解を行い、教材研究の在り方を検討した。著書読解、教材研究から公民単元づくりにいたる過程に見られる研究＝学びの構造を解明し、研究者の学びの構造から学習者の学びの構造へ活用することで、研究者の学び＝「真正な学び」を転用する過程を明らかにした。

そのために、加藤（2003）『日本の選挙』を取り上げ、その著書の章節構造、内容構造、学びの構造を、著書読解を通して解明した。その結果、次のことを成果として示すことができたとまとめることができるだろう。

- (1) 著書の章節構造は主に、小選挙区制と比例代表制という2つの代表的で、世界の学会に認められている選挙制度の功罪を比較考察している。
- (2) 著書の内容は、制度、思想、理念の3つの関連構造として組織されている。
- (3) 著者は、選挙の制度、民主主義の思想、社会の在り方に関する理念の3つの相互関連を認識することこそを主張し、制度の詳細な情報だけを追いかけるよりも、3つの相互関連の追究することを重要視している。
- (4) 教材研究は、これら(1)から(3)のいずれかに焦点化するが、その決定は、教科観に依存している。(1)は内容重視、(2)は教科内容重

視, (3) 教科目標重視, の教科観に依存している。

### 参考文献

池野範男・渡部竜也・竹中伸夫 (2004a) 「「国家・社会の形成者」を育成する中学校社会科授業の開発－公民単元「選挙制度から民主主義社会のあり方を考える」－」『社会科教育研究』91, pp.1-11。

池野範男・渡部竜也・竹中伸夫 (2004b) 「認識変容に関する社会科評価研究 (1)」『学校教育実践学研究』(10), pp.61-70。

池野範男・福井駿 (2015) 「「真正な実践」入門－価値 (哲学) 領域の読解を事例にして－」『学習システム研究』(2), pp.1-10。

池野範男 (2016a) 「教師のための「真正な学び」研究入門－教材研究のための論文読解比較研究－」『学習システム研究』(4), pp.1-12。

池野範男 (2016b) 「真正な歴史研究実践－白須浄真著『大谷探検隊研究の新たな地平』を事例に」荒川正晴・柴田幹夫編『シルクロードと近代日本の邂逅』勉誠出版, pp.3-21。

伊藤光彦 (1989) 「歪みの場としての民主主義－カール・ポッパの比例代表選挙制度批判－」『日本ドイツ学会ニュース』8, pp.50-53。

加藤秀治郎 (2003) 『日本の選挙 何を変えれば政治が変わるのか』中央公論社 (中公新書)。

濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編 (1997) 『新版社会学小辞典』有斐閣。

Popper, K. (1987) Zur Theorie der Demokratie. *Spiegel*, 41(32), S.54-55.

### 著者

池野 範男 広島大学大学院教育学研究科